

月報 500 号と私……

所員 黒田 彰三

月報が 500 号と言うことは 42 年間継続されていると言うことである。これほど続いたことを誇りに思うとともに、このための原稿の投稿者、編集者、事務局の努力に感謝しなければならない。

小生も事務局員として社研月報に携わったことはある。編集後記も 10 回くらいは書いているかも知れない。しかし自分にとっては最近の研究活動の一環を「資料紹介」の形で載せて貰っているのが喜びである。「経済学論集」や「学会誌」で余り歓迎されない内容を受け容れて下さり、一部の関心のある研究者への情報発信としてのみでなく、講義やゼミ指導の資料として活用できている。月報は「完成稿」でないまだ準備段階であるモノを載せることを基本にしているので、特別批判はされまい。この基本方針は若い研究者には好都合であろう。活用して貰いたい。

最近の小生の社研との関わりは主として「合宿集中特別研究会」への参加と「年報・月報」への投稿である。勉強できることも多いが旅を楽しむことも出来る。一人の気儘な自由旅行も良いが引率されて身を委せてついていくだけの旅も結構楽しい。工場見学や街並み調査も本当に面白い。これに基づいた講義やゼミ指導もしばしばある。この合宿研究会の場所を学部ゼミでも合宿の場所として選んで学生諸君とともに細かく調査したところもある。

そもそも小生が社研と関わりを持つようになったのは、1972 年に助手に採用された時である。当時、指導教授（故江澤譲爾先生）が社研の所長をされていたからである。絶好（？）の事務局員として迎え入れて下さったようである。爾来、30 年以上、除名もされず、強弱はあるが、関わりを持って来た。考え方の違う人との交流もここが中心であった。無論、グループ研究を承認していただいて、有意義な研究を楽しい仲間と送ることもできた。さらには「事務局長」という要職に 4 年間もついて、腕を振るわせて（？）いただいた。感謝の他ない。おかげで充分に年を取り、髪は薄く、お腹（そして面の皮）は分厚くなった。もうこれ以上、何も望むことはない。 合掌